

《アンコール・ワットの浮き彫り》

qカウラヴァ軍とパーンダヴァ軍の戦闘
(マハバーラタ)

wカイルース山上で瞑想するシヴァ神と、
山を動かそうとする魔王ラーヴァナ、
猿の戦いなど

eスーリヤヴァルマンの行軍

r天国と地獄

t乳海攪拌

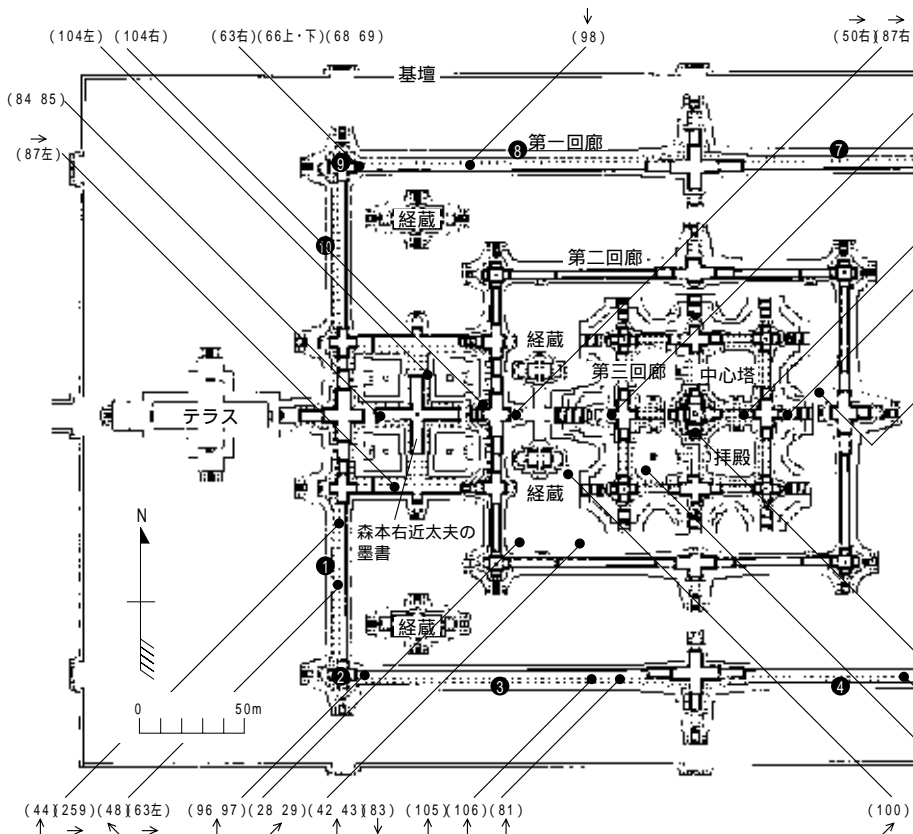
yヴィシュヌ神と阿修羅の戦い

uクリシュナとバーナの戦い
(ハリヴァンサ)

i神々と阿修羅の戦い

oハヌマン、シーターに指輪を渡す
ガルダに乗るヴィシュヌ神
太陽神、月神、八神の行列など

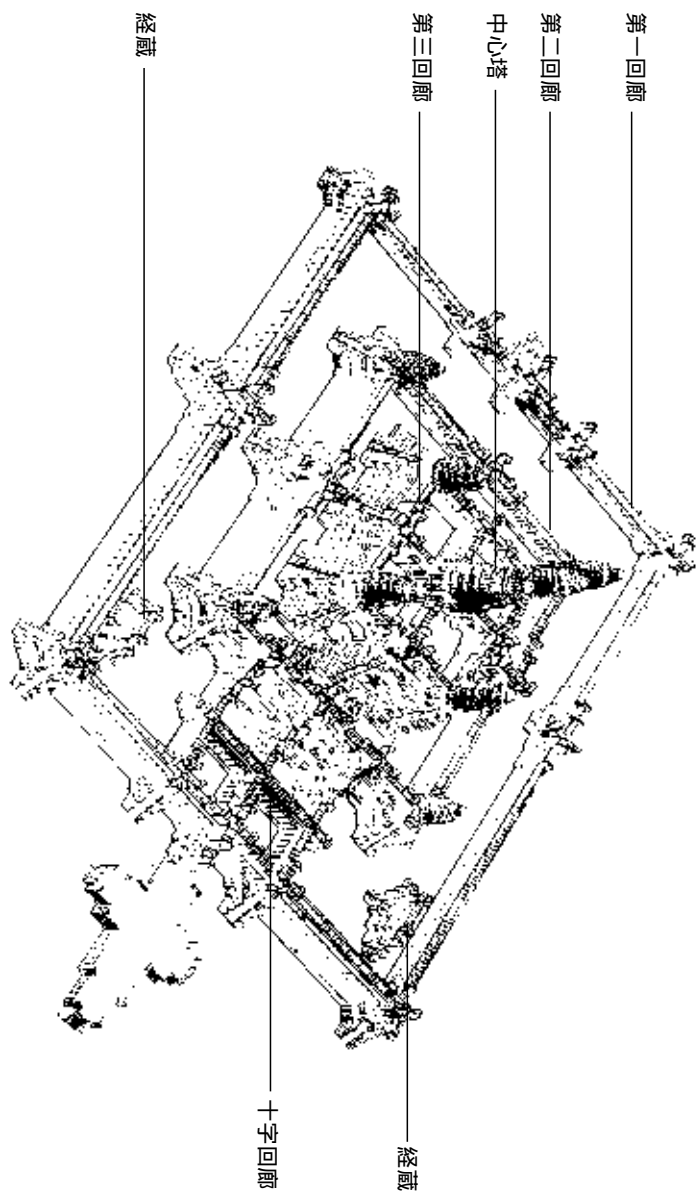
! **♁**ンカー島の戦い
(ラーマヤナ)



【図5】アンコール・ワット平面図と掲載写真撮影地点
 (『地球の歩き方 アンコールワットとカンボジア2001～2002年版』
 などをもとに作成)

本書掲載の写真— 撮影地点 撮影方向 () 掲載ページ

【図6】アンコール・ワット見取り図（石井他、1986）



第一章 太陽を取り込んだ究極の演出

アンコール・ワット

太陽は神と王のシンボル

ところが、姿を見せなかった秋分の日^{*}の太陽を、僕は思いがけない形で写し撮っていた。プリズムの透過光のように空が黄色や橙色に彩られた朝焼けを撮影した、あのフィルムだった。ルーペで拡大してみると、神殿全体が炎をあげて燃えているように赤く光り輝いていた。

それは、地平線から姿を現す瞬間の太陽が、神殿の背後に強烈な光を浴びせたために、建物の外側にまで光があふれ出し、神殿全体が赤く縁取られたのだった。この赤い輝きは、アンコール・ワット自身が発光するオーラのようだった。あ
のとき雲がなければ、中心塔の先端から出てきた太陽は、どれほど神秘的な日の出を見せてくれたことだろう。

今回撮影したフィルムを見ていて、アンコール・ワットは、ひょっとして太陽による視覚的效果を狙って、意図的に東を背にしているのではないかと、そんな気が僕はしてきた。

調べてみると、アメリカの科学雑誌『サイエンス』が一九七六年に掲載した論

* 秋分の日 太陽が黄経一八〇度の点で天の赤道をよぎり、北半球から南半球に入る。その時刻を含む日が秋分の日。太陽はこの日真東から昇り、真西に沈む。昼夜の長さがほぼ等しくなる。





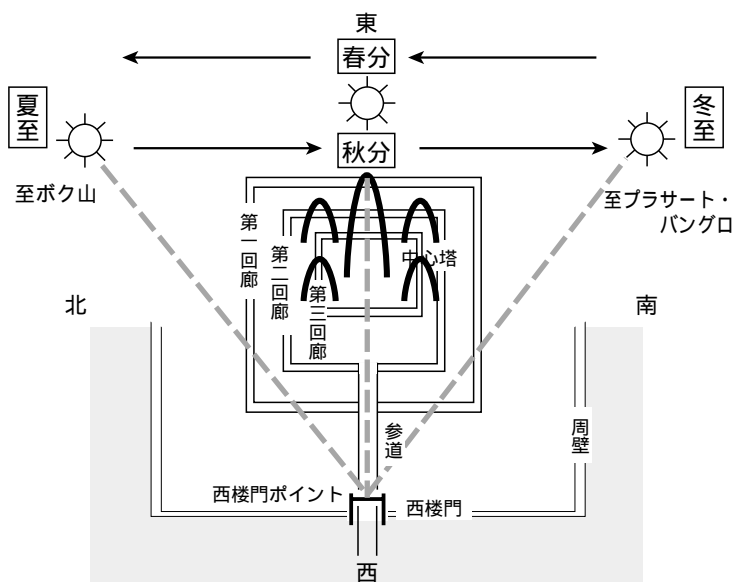
飛行機の窓から見たアンコール・ワット

文が見つかった。「アンコール・ワットの天文学と宇宙論」と題されたこの論文によると、アンコール・ワットには「太陽を観測する三本の重要な線」がある。

僕が三脚を立てたのは、西楼門をくぐってすぐの参道である（以下「西楼門ポイント」と呼ぶ）。その場所を観測点として、正面の中心塔と結ぶ線が、春分・秋分の日の出の位置。そして、距離は遠いが中心塔から左手になる聖山ボクの山頂と結んだ線が、夏至の日の出の位置。右手の方にあるプラサート・バングロ遺跡と結んだ線が、冬至の日の出の位置になる【図7】。王宮に仕えた占星術師は、この三本の線によって一年間の太陽の運行と四つの季節の節目を観測していたのだろうか。

この論文にしても、春分・秋分の日の出がアンコール・ワットに特別な視覚的效果をもたらしているとは強調していないが、意図的に建物の背を東にしていることは間違いないようだ。

王の墓としても使われたから西向きなんだという説が、頭だけで練り上げた机上の論理のようで、現場に



【図7】太陽の運行を観測する三本の線

立ってアンコール・ワットの本当の姿を見ていないのではないかという気がしてきた。それにしても、なぜアンコール・ワットだけが、東を背にして、太陽にこだわるのだろうか。

アンコール・ワットは、ヒンドゥー教の三大神^{*}のひとり、ヴィシュヌ神を祀った神殿である。ヴィシュヌは、太陽の光り照らす自然現象を神格化したもので、太陽の顕現とされている。さらに、アンコール・ワットを建てた王の名はスーリヤヴァルマン二世という。「スーリヤ」とはサンスクリット語で「太陽」を意味している。じつは、太陽がアンコール・ワットのキーワードであり、シンボルだったのだ。

おそらく、アンコール・ワットの設計をまかされた者は、建築の中で太陽をどうやってアピールしたらいいか考えたのだろう。そして、それを実現するために、正面を東に向けるという伝統的な建築ルールから逸脱してでも、あえて東を背にしたに違いない。

その結果、春分・秋分という昼夜の長さが等しくなる特別な現象の日に、神殿の最も神聖な中心塔の先端から太陽を昇らせるという、天体の運行を取り込んだ究極の演出が可能になったのだ。僕は、今度は乾季^{*}にあたる春分の日に、その究極の演出を目撃してみたくなった。

天体も含めた神殿の規模

スーリヤヴァルマン二世は、歴代のアンコール王^{*}のなかで最強の人物とされて

*「アンコール・ワットの天文学と宇宙論」(Nankka 1976) 巻末、参考/引用文献、参照。

*西楼門 アンコール・ワットを方形に取り巻く石壁の西側に設けられた大きな重層の門。表参道から本殿に向かうには西楼門をくぐる。

*三大神 多神教のヒンドゥー教は、神々のほか動物、草木、山河などさまざまなものを信仰の対象とする。その中で圧倒的に信仰を集めているのが、ヴィシュヌ神とシヴァ神だ。この二神にブラフマー神を加えて三大神とされている。

*乾季 乾季は二月から五月、雨季は六月から一月。

*歴代アンコール王 八〇二年から約六三〇年間続いたアンコールの歴史に、二十数名の王の名前が並ぶ。この中でとくに有名な王は、初代のジャヤヴァルマン二世。アンコール・ワットを建てたスーリヤヴァルマン二世、都城アンコール・トムを築いたジャヤヴァルマン七世である。





中心塔の拝殿に上る階段